

2017年12月8日の竣工から間もなく6年を迎える助産所。2018年8月の保健省による診療認可、10月の保険適用決定など、各種許認可手続きを終えてまもなく6年目を迎えます。右写真報告のように、その助産所では安全な出産、健康な赤ちゃん誕生を日々支えています。

2002年の「母と子のコミュニティスクール事業」から始まったPIHS(パササンバオ総合ヘルスサービス)と当団体HANDSの「母と子の命を守る」活動。ナプサさんの民族サンギル語で「連帯」を意味する「パササンバオ」。こうした活動は行政や他の医療機関との連携が進み、私たちの「支え」もほぼ不要になりました。協働の実りの一つ、健康な赤ちゃんの誕生や産後ケアの様子を10月写真報告からお伝えします。

この10月パササンバオ助産所が迎えた新しい命(10/7付報告)



今朝(10/7)生まれたばかりのマギンダナオ民族の男児。ゼネラルサントス市西方100km余のマイタムからの搬送だったが、母子とも元気です。



助産所に近いカルンパン在住のピラーン民族のお母さん(10代)も無事男児を出産しました。

産後検診で助産所を訪れた新生児と母親(マラナオ民族・18歳)。職を求めてミンダナオ西部からの移住者です。



昨夜(10/6)10時に誕生の女児。母親は助産所近隣に在住のサンギル民族です。



近隣の医療機関と合同で巡回診療を実施 ムジャ地区(8/13)、マアシム町(8/16)



8月13日 助産所に隣接のムジャ地区で、近隣のモロヤピラーンの住民57名にお弁当を配布、うち45名が無料診療を受けました。また、男児20名の割礼処置は助産所が担当、血液検査等は、臨床検査技師を目ざして、現在インターン研修中の奨学生ザイラが担いました。8月16日 ゼネラルサントス市西方の町マアシムでも、他の診療所や行政機関と協力して巡回診療を実施しました。そこでは近隣モロ民族コミュニティ住民150名余が受診し、助産所チームは男児対象の割礼や妊婦たちの検診を担当しました。

家族計画セミナー実施



「家族計画の日」を記念して 助産師協会(代表Angie Pauleさん)と協働で無料の研修会を実施し、各コミュニティから多数の参加がありました。



ボルー村の小規模アグロフォレストリー短信

コ罗纳ダル市の辺境山岳部に位置するピラーン民族のボルー村は、協働の初期にはカトリックミッションCMIPと、3年前からは住民組合TBAと協働で、環境保全と収入向上のため小規模アグロフォレストリーを継続実施しています。今回も10世帯各10本のココヤシ苗の配布報告がありました。

伝統技能を生かしたチボリ女性組合の活動 — 支援4年目のTWHと、すでに自力で進化発展中のCOWHED —

ティヌオス女性ハンディクラフト組合/TWH



組合員の手作り竹細工は、先住民族学校ロバート先生の手でニス塗られ、コ罗纳ダル市のNDMUやモールの売店で販売されるほか、数か月前に完成したレイクセブ町黙想の家にある直売所「チボリハウス」でも販売されます。



11月にはクリスマスに向けて黙想の家を訪ねる人々も増え、ビーズ作品とともに母親たちの収入向上を支えます。

第3の収入源として期待のハヤトウリのピクルスやバナナチップなどの食品加工品は、昨年支援した半地下構造のキッチンで商品化に向け励んでいます。

女性の健康と開発を目指す組合/COWHED

2002年のマイクロファイナンス事業から支援を始めたCOWHED。マニラを含む国内市場の拡大を受け、当団体の日本での販路拡大による支援は不要となりました。さらに、組合員の研修や施設の改善についても、海外の政府開発援助などにより進化しながら発展を続けています。



← マニラ首都圏マルンダロン市のイベント出展中のCOWHEDのブース

2000年に松尾基金で支援した「伝統の家」の隣に、今年完成したカナダ政府支援のガラス張りの新店舗 →

